

第1章

附属長岡校園連携研究の取組

第一章



連携研究主題 「創造的な知性を培う」

「創造的な知性」：新たな概念，認識，価値観を創りあげる能力

私たちは、求める人間像を「個性的で豊かな人間性をもつ子ども」と描いている。その実現のためには、子どもの「創造性を伸ばす」ことと「豊かな知性を育てる」ことが大切であると考え、連携研究主題を「創造的な知性を培う」と設定した。

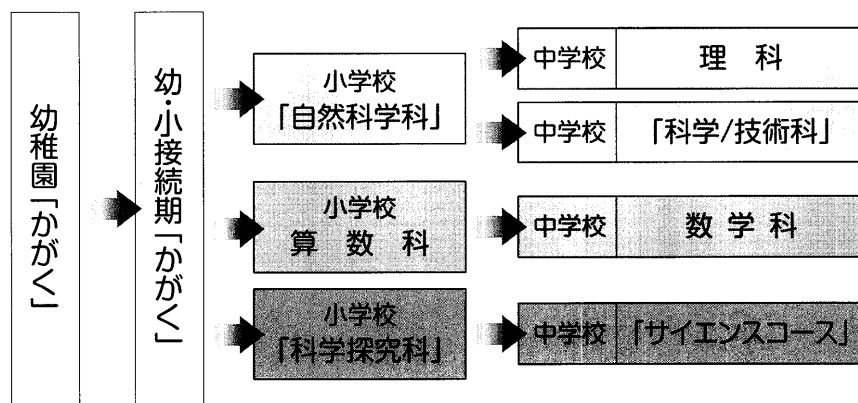
子どもが、新たな概念，認識，価値観を創りあげることを積み重ねて、校園全体で「創造的な知性を培う」に迫るために、「感性」「科学的なものの見方・考え方」の段階的なはぐくみに着目し、これまでの各校園独自に取り組んできた研究の成果を基にしながら、幼・小・中連携研究を平成15年度にスタートさせた。

1 文部科学省指定教育課程研究開発学校としての取組

附属長岡校園は、平成15年度から18年度の4年間、文部科学省の研究開発学校としての指定を受けた。そして、研究開発課題「創造的な知性と自然との共生の心を培う『科学的な感性，科学的なものの見方・考え方』をはぐくむ幼稚園・小学校・中学校の12年間を見通した教育課程の研究開発」に向け、先進的で提案性のある幼・小・中連携の姿を示そうと新設教科の設定，理数系教科の時数増を行い、教育課程の改善に取り組んできた。

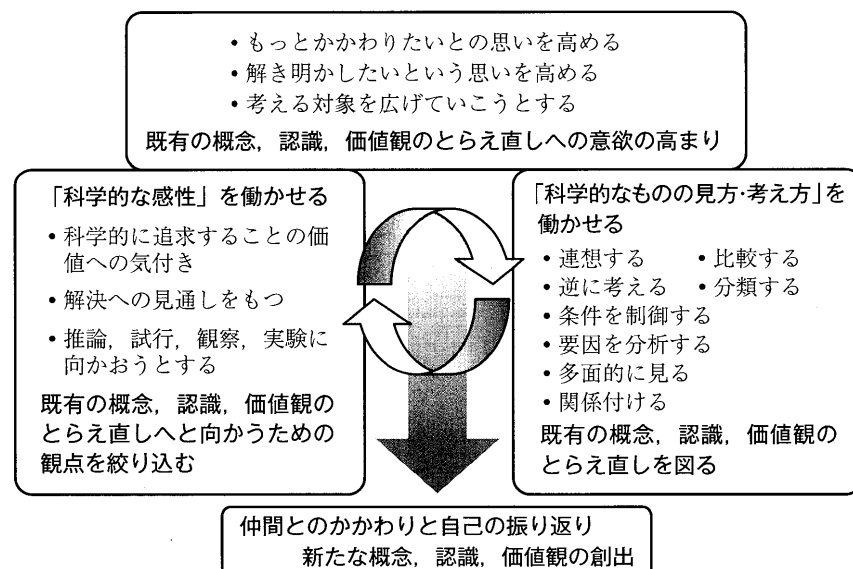
カリキュラム開発

科学教育に重点を置いた3つの教科連携を構想し、幼稚園・小学校・中学校のなめらかな接続を目指す連携教育課程を編成した。



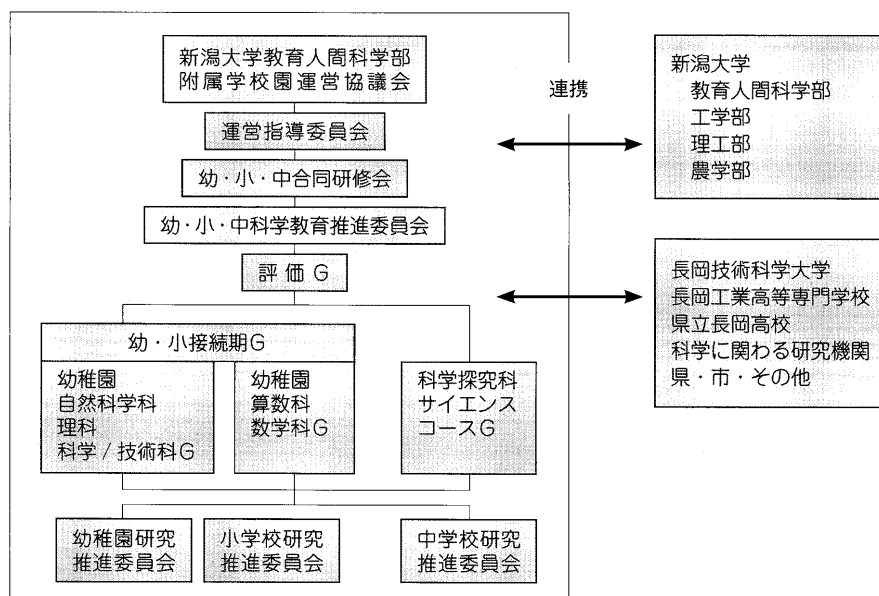
授業改善

目指す子どもの姿を具現していくため、子どもが「科学的な感性，科学的なものの見方・考え方」を働かせる学習の様相を整理した。



研究組織

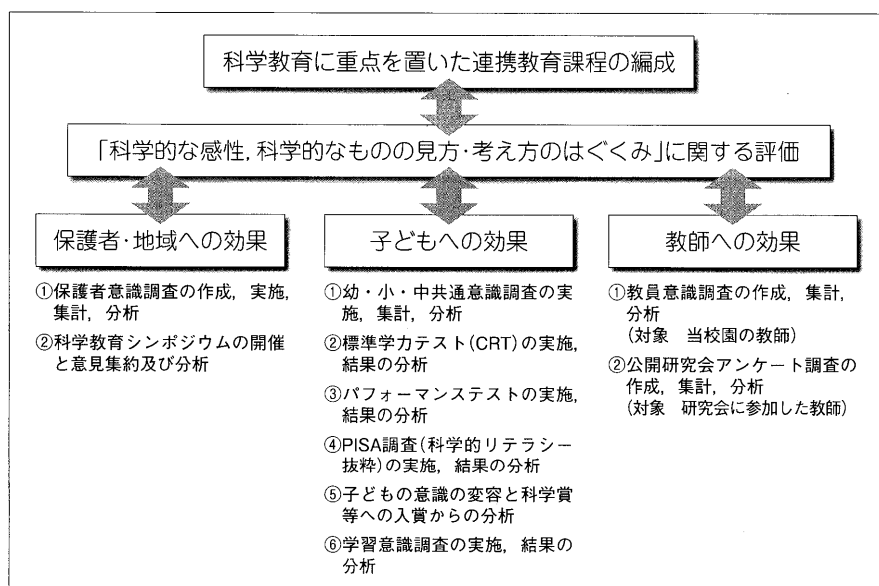
運営指導委員会及び校園内の研究組織を編成した。校園内に幼・小・中の連携に基づき3つの教科別の研修グループと評価グループを設定した。



評価法開発

連携教育課程を「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」のはぐくみという観点から評価した。そのための方法の開発を行い、実施・分析した。

なお、研究組織の評価部がその中心となった。



2 第1次研究の総括

カリキュラム開発

幼・小・中の12年間を見通した科学教育カリキュラムの開発を行い、以下の成果を得た。

- 幼・小のなめらかな接続のために、幼稚園年長11月から小学校第1学年7月までの期間を接続期として、教科の枠にとらわれず遊びを通して総合的に学ぶカリキュラムが有効である。
- 教科群ごとに、形成したい概念、認識やはぐくみたい資質・能力を連携の柱として設定し、それを軸にカリキュラム連携を図ることが有効である。
- 総合的な学習の時間においても科学的なリテラシーを養う内容を取り扱うことで、科学的な根拠を基に自分の在り方を総合的に考え、自己決定していく姿が見られた。

授業改善

「確かな学力」として示されている「思考力」「判断力」「表現力」「問題解決能力」「学ぶ意欲」「知識・技能」「学び方」「課題発見能力」について、中核となる力を「思考力」として、「感性」と「理性」の働きに着目し、その育成にアプローチしていくことが大切である。

研 究 組 織

幼稚園・小学校・中学校の連携が学力面においても、生徒指導面においても、今後より大切になってくる。連携を進めていく際に大切なこととして以下のことが挙げられる。

○全教科等で、共通の切り口（１次研究における科学）から研究を進めること。

○幼・小・中の教員が実質的な仕事の重なりをもつような研究組織で連携を進めること。

そのことにより、「意識や意欲の高まり」、「自信や満足感の向上」、「子どもの12年間の学びの連続性を意識した指導の深まり」がなされる。

評 価 法 開 発

１次研究においてはぐくみを目指した「科学的な感性」「科学的なものの見方・考え方」は従来のペーパーテストでは評価しにくい能力である。そこで、「説明する」「予測する」「利用法を考える」等を設問に取り入れた「パフォーマンステスト」の開発によりそのはぐくみの評価に迫った。

「思考力」は見えにくい学力とされてきたが、「パフォーマンステスト」の開発、単元ルーブリックの作成により「見えやすく」することが可能である。

3 第2次研究の取組

(1) カリキュラムのつながり

科学系教科等における連携教科カリキュラム開発が、子どもの発達段階に応じたものであり、内容面、資質・能力面においてその実施の有効性が明らかになった。この成果を、科学系以外の教科等における連携に生かしていきたいと考え、文科省指定が終了した今年度も、三校園における12年間の連携を継続することとした。ただし、そこには12年というスパンを、「幼小」「小中」と子どもの発達段階に応じて区分するなどして柔軟に取り組んでいくこととした。全ての教科等において、実施可能な内容等について計画し、試行的な取組が始まっている。なお、科学系教科等が作成した連携教科カリキュラムについては、現行学習指導要領に則った教育課程を進めていく今年度からは、その内容を一部削減しながら、継続的に行っている。

(2) 授業改善について

第１次研究において、「感性」「科学的な感性」「科学的なものの見方・考え方」を働かせる学習過程を構築するという共通テーマに沿って実践してきた授業改善であるが、第２次研究では、各校園の研究に合わせてその学習過程に修正を加えながら取り組んでいくこととした。このように各校園独自の研究の色合いを出していく理由は、第１次研究において各校園で課題として残されたものを、第２次研究で明らかにしていくためである。こうすることにより、各校園の実態に合う授業改善につながると考える。しかしながら、三校園の研究の中心に据えられているものは、連携研究主題「創造的な知性を培う」であり、既有的概念、認識、価値観をとらえなおし、新たな概念、認識、価値観を創りあげるといった基本的な学習の流れは各校園ともに継承して研究を進めている。

(3) 組織について

科学系教科で行ってきた連携教科部会を、第２次研究では他教科等にも広げ、全教科等において連携部会を組織した。子ども同士の連携と教師同士の連携という人的な交流を基本として取り組み、次第に内容面や資質・能力面の連携に広げていく方向である。

また、教科以外の連携の可能性も視野に入れ、校園合同会議を立ち上げて、特別活動における連携を推進している。

開発指定研究（第１次研究）を推進するために組織された大学教授を構成員とする運営指導委員会を、第２次研究では校園全体の教育活動を推進していくためのものとして位置付け、引き続き大学と連携しながら研究を推進している。